

学校現場が一体となって取り組む教員育成と学校づくり

松宮 孝明

抄録

新型コロナウイルスの蔓延等、予想のつかない環境の変化や災害等で、教育の現場は様々な対応に追われている。それらに迅速かつ適切に対応できる教員の養成、学校づくりは急務である。全国の教員養成系の大学で教職の意義や特質については熱心に講義され、全国の学校現場で創意工夫された教育課程を編成し実施されているが、今後ますます変化の度合いが激しくなる世の中であって、望ましい教員育成や学校づくりはどうあればいいのだろうか。教員育成や学校づくりの原則や変遷（歴史）をもとに、38年間の小学校現場の経験を踏まえて考察した。

その中で、教員は現場でこそ大きく成長するものであり、学校づくりは学区・地域とともに歩んでこそ効果をあげるということを結論としたい。

キーワード 教職の意義・特質 教育実践 資質向上 チーム学校 学校での人材育成 OJT

小学校の教育課程 特色ある学校づくり 地域とともにある学校 カリキュラムマネジメント

1. はじめに（研究の背景と目的）

公立学校における教員育成と学校づくりはどうあるべきか。教職の特質を歴史的に概観し、特色ある教育課程の編成を概観しつつ、望ましいあり方を探る。

教員養成については各大学等で実施されているが、本当に望ましい人材育成の方途を学校現場から探りたい。そこで、**図画工作科の指導**をもとに、教員が育っていく過程をとおして考察する。

また、それぞれの学校では独自の1年間のカリキュラム（教育課程）を作成する。その際、その学校の実態を踏まえたり、学区、地域と連携したりして望ましい教育課程を作成する。

学校の実態をもとにした学校づくりについては、**図書館教育**を中心にした学校づくりをもとに考察する。

学区、地域の実情をもとにした学校づくりについては**環境教育**を中心にした学校づくりをもとに考察する。

2. 研究の概要

（1）先行研究の考察

①教職と教員養成の歴史

学校での人材育成を考える前提として、これまでの我が国の教員養成の歴史を振り返る。

我が国の近代における教員養成の歴史は、明治初期の師範学校創設に始まる。近世までの寺子屋で行われた手習いの個別教授法から、欧米型の近代的なカリキュラムによる一斉教授法に発展し、それに伴って、近代的な指導技術の習得が教員に求められるようになる。その要請に応えるために設置されたのが師範学校であった。

明治5年に公布された学制は、小学校教員の資格について、男女ともに年齢20歳以上で師範学校卒業免状を取得した者でなければその職につけないと定めた。

明治13年の改正教育令は、師範学校を各府県が設置すべきものと定め、教員資格を師範学校卒業証書と府県知事が授

与する免許状の二本立てとした。

変遷としては、明治18年の第3次教育令によって、免許状に一本化され、現在までわが国教員資格は免許主義を採用するようになった。免許状の有効期限は明治23年から終身有効になった。明治前期の教員出身層の中心は士族であったが、明治30年代以降になるとその層は農民層へと移行していく。農家の子弟などが自立の糧を得るために教師を目指すようになっていった。

大正から昭和の時期は幾多の変遷をしながら師範学校の時代が続いた。

昭和24年、国立学校設置法の制定により、各地の師範学校は国立の学芸大学（のちに教育大学に改編）または国立大学の学芸学部（のちに教育学部に改編）として生まれ変わった。

戦後の教育現場は、社会全体と同じように混乱と窮乏の中にあった。教職への自信喪失のために多くの教師が教壇を離れ、教員不足の事態が続いた。教員養成が急務であった。

アメリカ教育使節団の勧告を受けて1946（昭和21）年設置された教育刷新委員会の決定により、教員養成は大学教育で行うものとなった。官立だけでなく私立・公立のいずれにおいても可能となり、いわゆる「解放制」の導入がなされた。旧師範学校を母体とした教員養成系の大学・学部だけでなく、それ以外の一般大学でも教員免許取得に必要な単位を授与することができるようになった。1949（昭和24）年、教育職員免許法が制定され、教育長、校長、指導主事にも免許制が適用されるとともに、この時に1級と2級に区分された。

戦後、まだまだ慢性的な教員不足は解消されず、優れた人材を教員として確保するため、1974（昭和49）年、学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法（人材確保法）が制定され、公立小中学校の給与は一般公務員よりも高額となった。こうした教師環境の改善も手伝って、昭和40年代終わりごろから教職志望者が増加傾向に転じた。

教員養成の現状としては、1997（平成9）年の教育職員養成審議会で「教職教養」の重視が提言された。具体的には、「教科に関する科目」をほぼ半減し、「教職に関する科目」の比率を高めた。さらに、2006（平成18）年の中教審答申で「教職実践演習」の創設が提言されたので、2010（平成22）年度入学者からこの演習が必修化された。具体的には、「教員として求められる4つの事項」と「5つの指導法」を重視することが重要とされ、今日に至っている。

「教員として求められる4つの事項」

- ①使命感や責任感、教育的愛情等に関すること
- ②社会性や対人関係能力に関すること
- ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関すること
- ④教科・保育内容等の指導力に関すること

「5つの指導法」

- ①役割演技（ロールプレイ）
- ②グループ討議
- ③事例研究
- ④現地調査（フィールドワーク）
- ⑤模擬授業

②我が国における教育課程の歴史的変遷

戦後、文部省は民主主義を定着させるために教育課程の改革に着手した。「修身科」を廃止し「公民科」を設置、「画一教育から自発性を重視した教育への転換」を目指した。このあたりから歴史的変遷を概観する。

昭和21年日本国憲法が公布され、昭和22年教育基本法が制定された。教育基本法と学校教育法の公布と並行して、昭

昭和22年、最初の学習指導要領が制定された。しかし、この時は試案とされたとおり、国として画一的な教育が意図されたのではなく、手引書扱いであった。家庭科は男女共学の理念のもと、女子だけでなく男子にも導入された。

昭和26年、文部省は学習指導要領の全面改訂を行った。この改訂以降、「教科課程」を「教育課程」、「考査」を「評価」と呼ばれるようになった。それまでの9教科に代わって4領域という大まかな枠組みに再編された。4領域とは、「主として学習の技能」（国語、算数）、「主として社会や自然についての問題解決」（社会、理科）、「主として創造的要素」（音楽、図工、家庭）、「主として健康の保持増進」（体育）。領域ごとに合科的な授業が意図され、極めて柔軟なカリキュラムであった。また、「自由研究」は、「教科外の活動」に変更された。

昭和33年の学習指導要領の改訂は、系統学習的要素を取り入れる試みに軌道修正された。それは、学力低下や青少年の非行、規律の低下などから経験学習的なカリキュラムが批判にさらされたためと考えられる。大きな注目点は、「道德教育の徹底」「基礎学力」「科学技術教育」の3点である。改正によって、4領域に整理された。「各教科（国語、社会、算数、理科、音楽、図工、家庭、体育）」「道德」「特別教育活動」「学校行事等」である。また、学習指導要領の法的拘束力が強化され、「試案」の文字も削除された。授業時数に関しても、小学校では一単位時間は45分、中学校では50分、年間授業日数は35週とされた。さらに特筆すべきは、特設時間「道德」の設置である。

昭和43年の改訂は、教育内容の現代化に舵を切った。経済成長を担う人材育成の要請と相まって、科学技術の進展に伴い知識量が膨大に増大したためと考えられる。特に、算数と理科においてその傾向が大である。領域は4領域から3領域に再編された。「各教科（国語、社会、算数、理科、音楽、図工、家庭、体育）」「道德」「特別活動」である。また、授業時数の表記が「最低授業時数」から「標準授業時数」へと変化した。

昭和52年の改訂は、能力主義への反省から、ゆとりのある学校生活が目標に掲げられた。大きな特徴としてあげられるのは、授業時数の削減である。特に、国語、社会、理科である。（体育や特別活動はそのまま。）

平成元年の改訂は、臨教審（臨時教育審議会）からの影響を大きく受けた。改訂の主眼は以下の4点であった。

- ① 心豊かな人間の育成
- ② 自己教育力の育成
- ③ 基礎・基本の重視と個性教育の推進
- ④ 文化と伝統の尊重と国際理解の推進

また、着目すべきは、生活科の新設である。1年生と2年生の社会と理科を廃し、新たに生活科が創設された。

平成10年の改訂の特徴は、「ゆとり教育」と「総合的な学習の時間の創設」である。完全学校5日制の実施とともに、年間授業時数が大幅に削減され、学習内容も削減された。総合的な学習の時間は、教科の枠を超え、横断的に学習できることを狙った。よって、各教科・道德・特別活動に総合的な学習の時間が加えられ4領域となった。

平成20年の改訂は、「ゆとり教育」からの反動として、授業時数を増やし、学力向上に重きが置かれた。知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成が大きなねらいで、小学校高学年に「外国語活動」が導入された。

平成29年の改訂は、「生きる力」のその先の力を育成する「社会に開かれた教育課程」が重要視され、特に、主体的・対話的で深い学びを実現する「アクティブラーニング」や、子どもや地域の実態に即した教育を実現する「カリキュラムマネジメント」を実施し、知識及び技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性、の3つの力をバランスよく育成することが提唱された。具体的な変革は、英語教育の充実化・教科化、プログラミング教育の導入などが挙げられる。

③小学校における教育課程編成の原則

次に、小学校が教育課程を編成する際の原則を概観する。まず、学校教育目標の設定、指導内容の組織及び授業時間数の配当を基本的な要素として検討しなければならないが、その前提としなければならない原則的事項がある。

「小学校学習指導要領 第1章 総則」では、以下の4つにまとめて示している。

- ① 法令及び学習指導要領の示すところに従うこと
- ② 児童・生徒の人間として調和のとれた育成を目指すこと
- ③ 地域や学校の実態を考慮すること
- ④ 児童・生徒の心身の発達段階や特性などを十分考慮すること

以上をもとに、学校現場での実践研究に移る。

3. 実践研究

【1】魅力的な絵画指導を求めて

I. 研究の概要

本校は、開校以来42年間、図画工作科の指導に力を入れている。近年も全国教育美術展において中央の大きな賞を受賞している。(昨年度は、教育美術振興会名誉会長賞《全国第3位》)

その表彰式に出席して、すべての学級とも担任が指導しているというと驚かれる。つまり、中央の大きな賞を受賞する学校は、図画工作科の指導においてスペシャリスト(図画工作科専科教員)がおられ、ほぼ全学級を指導しているから、その高いレベルを維持できるというのである。

本校は、何も特別なことはしていないが、よい機会であるので、どのようにして、この取り組みが継続できているのか、自分たちで探ってみようと試みた。

そして、以下の本文に詳細を記すが、1枚の作品を仕上げるのに3度の研修会を持っていることが、「より魅力的な作品完成と、全国での表彰」と「教員の図画工作科指導の資質向上」に有効な手立てとなっていることが判明した。

II. 研究テーマ設定の理由

1. 研究の動機

上記の通り。

2. 研究の目的

どのようにして魅力的な絵画指導ができる力量がついてきたのかを検証する。

III. 研究の方法

1学期の生活画の指導について、構想から完成までの教員同士の交流会を検証する。

1. 研究の目的、計画、スケジュールの検討

2. 各段階の交流会

3. 研究のまとめ

IV. 研究の実際(別添資料…省略)

1. 第1学期の生活画の指導に入る前の構想交流会

2. 第1学期の生活画の指導の途中段階でのアドバイス交流会

3. 第1学期の生活画の指導が終わったの振り返り交流会

V. 研究の考察およびまとめ

1. 第1学期の生活画の指導に入る前の構想交流会について、各学年でどのような交流ができていたかを検証した。

○1年生は、題材を機関車に絞った。しかし、そのうえで、技法は、「ゆびで全体にドロドロにぬり、全体のかたまりをつかませる方法」や「アクリル絵の具を全体に塗り、ひっかいて浮き出させる方法」「コンテで思い切って描かせ、消しゴムで消していく方法」など、いろいろ構想を出し合えた。画材などについても選択肢を広げる話し合いができた。あと、まわりに乗っている子どもたちを書き加えるかどうかも話題にできた。

○2年生は、「ほとけさま」「虹」「野菜」の3つの題材を出し合った。「ほとけさま」は学校近くのお寺に行って実物を

見ることが大切だということになった。画材や構図についてもいろいろ意見を出し合えた。写実のみではなく、大まかな構図ができたなら、あとは、仏様が何をしているかは自由とし想像の世界を膨らませるというアイデアも出た。「虹」についても、「空から種をまく→花が咲く→虹が生まれる」などの発想が出た。「野菜」についても、「野菜の遊園地」「野菜の迷路」などのアイデアが出た。

○3年生では、「キャベツ」「ザリガニ」「リコーダーを高層ビルに見立てて」の3つの題材を出し合った。「ザリガニ」では、実際に飼った方がいいなどの意見が出た。

○4年生では、「普段の掃除の場面」「トラクター」「運動している友だち」の3つの題材を出し合った。「掃除の場面」では、たくさんの子どもが掃除しているだろうが、1人を中心にしっかり描かせることが、「トラクター」では、タイヤを大きくしっかり描かせることが話し合われた。

○5年生では、「コンバイン田植え機」「筆箱の中の道具」「普段見慣れた校舎などの風景」の3つの題材を出し合った。「校舎など」でも、○○に映った校舎や○○越しの風景などの発想が話し合われた。

○6年生では、「学校生活」「本棚」「風景」の3つの題材を出し合った。「風景」では、パノラマ的に紙を細長く使ってみるアイデアなどが出された。

2. 第1学期の生活画の指導の途中段階でのアドバイス交流会について、各学年でどのような交流ができていたかを検証した。

○1年生では、「機関車をもっとダイナミックに塗り込もう」「空いたところは塗らなくていいのでは。塗り残しがあってもOK」「ひっかき遊びを取り入れるにしても、全く下絵と同じようにひっかかなくてもいいのでは」という意見交流ができた。

○2年生では、「仏様は基本形をスケッチしたらあとは自由な発想を取り入れてもいいのでは」「野菜は全面にうすくえのぐで塗った方がいい」「虹は、定規、おはし、くぎなどいろいろなものひっかかせよう」という意見交流ができた。

○3年生では、「キャベツがダイナミックに描けていていい。その調子で」「ザリガニの色は3年生なら思い切ってカラフルにしてもいいのでは」「線がぼやけている子はもっとはっきりした線に。途中で切れている子は紙の端まで描き足すようにアドバイスしてみてもいいのでは」という意見交流ができた。

○4年生では、「教室の床の板目なども線描しよう」「背景、まわりをどうするかについての助言方法で悩んでいる」「トラクターは鉄の塊感を出させたい」という意見交流ができた。

○5年生では、「高学年として、中心と考えているものは徹底的にしっかり書き込ませよう」「額縁の中にうまく収められている。その調子」「色の塗り方として、近くは濃く、遠くは薄くという助言をしよう」という意見交流ができた。

○6年生では、「子どもたちと相談して題材を変えた」「並んでいるものということで図書室を題材にした。一冊一冊を最後まで塗るのは大変だが、それができるのが最高学年といえるだろう」「紙の上下をカットして横長の作品にしてもいいのでは」という意見交流ができた。

3. 第1学期の生活画の指導が終わっての振り返り交流会について、各学年でどのような交流ができていたかを検証した。

○1年生では、よい面は「石を使ったひっかきは良い効果が出ていた」、反省点としては「SLのなかはもっと塗りつぶしてかたまり感を出すとよかったのでは」と交流できた。

○2年生では、よい面は「色画用紙、ケント紙、黄ボール紙など多彩な材料が使えてよかった。仏様は表情が大切だが、コンテでやさしい仏様の感じが出た。」と交流できた。

○3年生では、よい面は「リコーダーの直線的な構成のおもしろさが出た」、反省点としては「たて向きにした方が動きがよくわかる作品があった」と交流できた。

○4年生では、よい面は「観察力のある子の作品は良く仕上がっている。ダイナミックに描けている作品と細かく描け

ている作品の両方があるのがよい。」、反省点としては「トラクターの作品で、パターン化した作品があったのは残念。」と交流できた。

○5年生では、よい面は「田んぼの中の作業がありありと描けていたのは良かった。スプーンに映ったゆがんだ絵もよかった。」、反省点としては「固い表現や図案的な苗になった作品があったのは残念。」と交流できた。

○6年生では、よい面は「細かく描けていてよい。線だけの作品に仕上げてても良い。」、反省点としては「焦点がはっきりしないもの、表現が固いものにならないように気をつけたい。」と交流できた。

4. 総括

- ・事前検討会をやっている学校はある程度はあるであろう。そして、それぞれの学級で、作品が完成するのであろう。
- ・しかし、本校は、作品が完成する前の途中段階で、「アドバイス交流会」をするというところに特徴があり、それが素晴らしいことであることが判明した。これで、教員の図画工作科の指導力は大きく向上した。
- ・また、完成したらそれで終わりというのが通常であろうと思われるが、本校は、完成した作品を見比べながら「振り返り交流会」をやるというところがまたすごいことであり、すべての教員の資質向上（授業力、指導力）に役立っていることがわかった。

今後は、今回、研究および整理したことで明らかになった、下記事項に着手していきたい。

- ◆授業数過多にならないよう、全学年のすべての取り組みを精査し、必要なものは残しつつ、負担削減につなげる。
- ◆毎年、その学年の子どもたちの追究したいテーマは大事にしながらも、縦のつながりを強化する必要がある。
- ◆自分の作品に対しての自己評価、鑑賞の力向上も検討していく。

【2】学校図書館を中心にした学校づくり ～12年の足跡と今後の展望～

I 研究実践の方法

(1) 研究実践のねらい

本市では、全市立小・中学校において、統一して「毎日の朝の読書活動」に取り組んでいる。

本校においても、火木曜日の2日間、朝の読書活動に取り組んでいる。このことは、落ち着いた学校づくりに役立つと考える。

朝の読書活動を活発にするためにも、選べる蔵書をより多くし、本校の学校図書館をより活用しやすいものにしていきたい。

また、アクティブラーニングを志向していくとき、教科書とノートだけでなく、幅広い資料・情報をもとに学習を進めたいと思う。学校図書館の機能は読書センターだけでなく、学習情報センターとしての役割もある。よって、学校図書館大改造をきっかけに、全教室の中心に学校図書館を位置づけ、各学年各教科の学習に最大限生かす取り組みをすすめ、有効な活用方法を研究する。

落ち着きのある学習環境を確保し、授業での発言内容やノートなどに書く内容をさらに表現力豊かなものにするこによって、必ずや低学力の克服、学力向上につながるものと考え。

(2) 研究実践の方法

- ・学校図書館の整備
- ・保護者、地域のボランティア等の活用
- ・県立図書館や大津市立図書館の協力のもと行う学校図書館の大改造
- ・各学年各教科の授業への活用
- ・児童の委員会活動

II 具体的な研究実践内容

(1) 研究実践の年次経過

- ・平成 18 年度 校舎新築、学校図書館新装より子ども読書活動に力を入れる。
- ・平成 19 年度より
 - ・「読み聞かせママ」の活動がはじまる。今年で 10 年目。
(主に、毎週金曜日の朝の本の読み聞かせ)
 - ・学校図書館環境の整備…バーコード化、蔵書の整理整頓
- ・平成 27 年度の取組…文字活字に触れる機会の拡大
 - ・6年生のフロアに新聞(一般紙)閲覧台設置
 - ・「読み聞かせママ」の活動の充実
学期1回、各学年へのお話し会の実施
 - ・児童の図書委員会の活動による「下阪本幼稚園への読み聞かせ活動」
- ・平成 28 年度の取組…市教委による学校司書の配置…読書促進と教科学習への活用促進
 - ・校内学校図書館活用推進委員会の設置
 - ・「下阪本小学校図書館年間指導計画」の策定
 - ・県立市立図書館の協力による「学校図書館活用支援事業」実施
学校図書館大改造…学校図書館環境整備Ⅱ
 - ・文字活字に触れる機会の拡大
5年生のフロアに子ども新聞閲覧台設置
 - ・下阪本小学校 HP に、学校図書館コーナー開設
- ・平成 29 年度の取組…学校図書館の環境整備Ⅲ(季節や行事に見合った装飾の充実)
 - ・学校図書館環境整備Ⅳ(時期ごとの新刊本コーナーの設定)
「図書が図書館からはみ出してくるイメージ」
(入り口付近に、今日は何の日の本掲示)(出口付近に季節にあった図書の掲示)
 - ・保護者ボランティア活動の充実(毎週木曜日1回から、定期的に月曜日も拡大)
 - ・本は友だち旬間の設定(11/20～11/30)
☆下阪本幼稚園への読み聞かせ出前授業
☆校内へは、低学年への読み聞かせ活動、お話クイズ、おすすめの本紹介



(2) 学校図書館の大改造

- ・H28 年度学校図書館活用支援事業(県教委、県立図書館、大津市教委協力)受諾
- ・事業のねらい(学校)※もっと文字活字に触れ、情操と基礎学力定着に学校図書館活用を。
(主催者)※より活用しやすい学校図書館に大改造

- ・大改造の具体的事項
 - ◆図書の種類を3桁に。分類番号0から9に右回りに配列
(一般の公立図書館や大学図書館と同様に把握でき、各自が素早く自分の目的の本探しができることを目指す。)
 - ◆9番の読書センターと0～8番の学習情報センターのエリア分け
 - ◆全体が明るく、行ってみたいくなる魅力的な学校図書館へ大変身
 - ◆じゅうたんのある絵本スペースに大型本や丸テーブルを置き、大変身

- ・事業の経過 第1学期(6/2)実施校での図書館診断
 - ★除籍本の選定、除籍の処理
 - ★購入本の選定、注文
 - ★日本文学と外国文学の分別、各分類ごとの割合がわかりやすいように正しく分類
 - ★できるだけ、本のラベルの修繕、見出しキットの作成

夏期休業中(8/24)リニューアル実施、学校図書館活用にかかるオリエンテーション

- ★全部の図書を学校図書館外へ仮置き
- ★新しい計画に従って本棚の移動、本の搬入、整頓
- ★分類見方の表示、学校図書館内の案内表示

第2学期(9/1)リニューアルオープン

- ★活用開始。再度、各学級で使用方法のオリエンテーション実施
- ★貸出返却方法の徹底、返却場所の徹底

第3学期(2/21)学校図書館活用の実践<授業公開>

- ・学校司書(市費で前半期任用)の役割(1日4時間、週2日)
 - ★学校図書館環境整備…本の整頓、書架の整頓、掲示物
 - ★蔵書管理…廃棄、新規購入本の選定など、修繕、ラベル貼り
 - ★学級担任の学習指導支援…教科指導関連本の選定
 - ★児童の図書委員会の活動支援

- ・下阪本小学校ホームページ(<http://www.otsu.ed.jp/smsk/>)に、学校図書館コーナー開設



(3) 授業への活用 ～教室と学校図書館～

- ・学校図書館を各教科に生かす
- ・学習指導要領の趣旨にのっとり、授業に学校図書館を有効に活用し、「学校図書館を活用した、すべての教科等における言語力の育成」をめざす。
- ・事前に学級担任が要望することにより、関連本を参考図書として情報提供。
- ・具体的な授業実践の事例

<第4学年>教科「国語科」単元名「詩を楽しもう」…指導案は別紙資料7

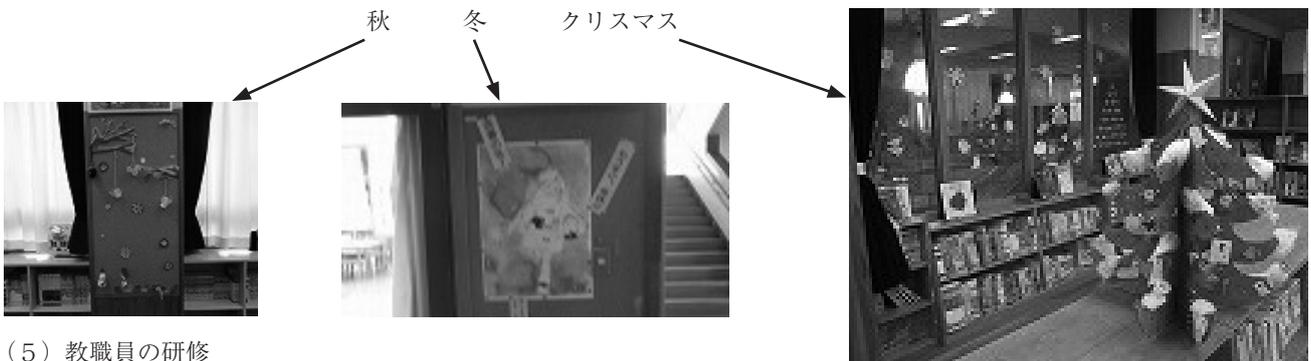
- ・取組内容…年間を通して、本がすぐ手に取れる環境整備、朝のスピーチ、季節を意識した読み語り、詩の学習について

ては1学期から詩の発表のし合い

- ・本時は、3回目。学校図書館や公立図書館からたくさんの詩の作品を借りてきて、いろいろな作品から選定し、しっかり練習できた。
- ・児童の様子…自分の班の練習もしっかりできた。身振り手振りで体を使って表現した。しかし、物は用いなかった。声の抑揚や強弱なども表現豊かに工夫できた。発表し終えたときの表情は、満足感でいっぱいだった。また、他の班の発表もしっかり聞いた。メモもしっかりとり、批評もしっかりできた。感動・感心したという発表も豊かな表現の1つになった。
- ・成果…他のクラスへ発表したい意欲でいっぱいになり、学校図書館を活用し、おのおのお気に入りの詩のストックがいっぱいになった。その満足感はノートにも表れた。
 - ・文字活字に慣れ、さらに学校図書館の活用の意欲が高まった。

(4) 児童の委員会活動及び、保護者ボランティアとの連携

- ・図書委員会活動による毎日の長休み、昼休みの開館、貸出返却活動
- ・図書委員会活動による下阪本幼稚園への読み聞かせ活動（H29年度で6年目）
- ・学校図書館運営ボランティアの活性化…季節に見合った環境整備（掲示物）
- ・定期的な朝の読み聞かせ（毎週木曜日）に加えて、別組織ではなく、その中で時間の融通が利く方々で環境整備や運営に参与。
- ・学期1回、全学年へのお話会イベントの実施（公立図書館の出前授業に頼らなくてもいいだけのレベルで、子どもたちからも好評。）



(5) 教職員の研修

< H28年度 >

- ・先進地への職員派遣…堺市立三宝小学校へ教員を先進地研修として派遣した。
(児童貸出冊数…年間1人70冊という学校)
- ・校長による読書活動推進の提案授業の実施…「クオレ」という本を30冊用意し、4年生全学級で提案授業を行った。

< H29年度 >

- ・夏季校内研修として、東京から、全国学校図書館協議会顧問の森田盛行先生にお越し頂き、講演をしていただいた。(演題「学校教育の中核としての学校図書館～学習を支える学校図書館のあり方～」)
(結果的には、大津市内の図書館教育担当者全体の研修会として開催した。)

Ⅲ 成果と課題

(1) 全国学力学習状況調査より

- ・国語Aの全国との差は縮まってきた。H27：-6.6 → H28：-2.8 → H29：-1.8
- ・国語Bの全国との差は縮まってきた。H26：-4.5 → H27：-2.9 → H28：-1.2
- ・少しでも新聞を読んでいる児童が多くなった。H28：51.3% / 全国45.2%

- ・ほぼ毎日、新聞を読んでいる子が多くなった。H29：12.0％／全国7.8％
- ・読書が好きな児童が増えた。H28：49.6％／全国49.3％
- ・少しでも読書している児童が増えた。H28：62.7％／全国63.5％
- ・全く読んでいない児童が減った。全国との差 H27：－5.1 → H28：－0.6

(2) 保護者ボランティアの関心や活動の拡大

- ・読み聞かせ活動に加えて、学校図書館環境整備部門<図書 of 整理整頓><季節にあった掲示物><運動会や同社工場などテーマに合った図書の紹介コーナー>にも活動を拡大

(3) 学校図書館大改造による学校図書館環境整備の充実、利用児童数の増大、各学年の教科学習への活用増大

(4) 読書意欲の向上…子どもの読書冊数増大の表彰…「賞状 読書100冊到達証」

(5) 読書量（貸出冊数）の増大

蔵書数… 10304 冊（H29.10月末）（H25～H29、4月～3月の推移省略）

◎全体的に貸出冊数は増えている。

△年度当初（4月）の取組が遅い。ただ、5月と6月は1000冊を超えた。

△7月の、夏休み前の取組が課題である。

△秋の取組の成果 だいぶ改善できてきたが、さらに努力したい。

(6) 5月の1ヶ月間の文科省読書量調査（H29.5）

4年生… 15.9 冊 / 1人あたり

5年生… 12.8 冊 / 1人あたり

6年生… 6.3 冊 / 1人あたり

全 体… 12.0 冊 / 1人あたり

☆無読者…0人

☆10冊以上（1ヶ月で）…152人

(7) 評価活動…「学校図書館評価基準」による振り返り

項目・年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	満点
1 基本理念	3	3	5	5	9
2 経 営	7	12	13	13	21
3 学校図書館担当者	4	4	8	8	12
4 学校図書館メディア	12	14	17	17	36
5 施設と環境	19	32	37	38	57
6 運 営	10	17	21	25	30
7 サービス	5	7	9	10	15
8 教育指導・援助	9	11	15	15	27
9 協力体制・コミュニケ	5	9	10	11	15
10 地域との連携	3	3	4	5	9
11 学図ボランティア	3	6	9	9	9
12 他団体連携協力	9	13	15	18	27
13 図書委員会	7	12	20	20	21
14 研 修	4	5	8	9	12
合計	100	148	191	203	300

- ・考察として、H26年度、評価基準の項目でしっかり評価してみて、不十分さが浮き彫りになった。
- ・年々、評価点は上昇しており、改善できてきた。公立図書館の協力のもと大改造による環境整備ができたこと、半年でも学校司書が配置できたことは大きかった。既存の読み聞かせの保護者ボランティアが定期的に運営にまで関わってくださるようになったことは大きかった。
- ・次年度に向けて、「図書以外のメディアの配置」「地域との連携、開放」「ブラウジングコーナーの設置」などに注目して、しっかり改善していかなければならない。

(8) その他

- ・学校図書館活用量の増大（学級での使用）
- ・絵本や物語への興味関心がさらに高まる。
- ・教科学習への活用量増大

< H29年度の例>…一部の教師から、全学年、全学級の教師の取組になりつつある。

☆3年生では、説明文の学習で活用した。

☆特別支援学級では、じゅうたんの絵本コーナーをよく活用し、市立図書館の「読み聞かせセット」なども多く活用している。

☆低学年でも、乗り物で働く人々の学習など、時期ごとに活用した。「朝の読書」のための絵本なども定期的に市立図書館から団体貸出を受けた。

☆4年生では、車いす体験、アイマスク体験などの障害者理解教育の際、市立図書館の協力も得て、大いに活用した。

☆5年生では、びわ湖環境学習の際、たくさん活用し、今後、学年末までに、「生き方学習」として、伝記等を多く活用する予定である。

☆最近でいうと、6年生の修学旅行前の平和学習の際、ブックトラックに約50冊持ちだし（担当者がセレクト）、全学級とも活用した。

☆秋の人権週間の際、職員室後ろのスペースに「人権学習関連本コーナー」ができた。（人権教育主任による）

- ・公共図書館との連携について

☆大津市でまず第一にいえることは巡回移動車「さざなみ号」による月2回の活用である。

☆また、全学級団体貸出券を作成しており、本年度も約50冊の団体貸出を20回以上活用した。

- ・日常生活への影響（学校全体の落ち着き、ことば遣いなど言動の穏やかさ、学力の基盤形成）
- ・学力の向上

(9) 今後目指していくこと

☆校内の学校図書館経営委員会を月1回定例開催する。

- ・季節ごとの特設コーナーの充実

☆「家読」（うちどく）への広がり

☆子育て支援への波及

- ・（本校低学年児童と未就学児童および保護者を招いての読み聞かせ会・ペープサート会の実施）
- ・幼稚園、保育所等との連携、市福祉部局を通じて子育て支援センターとの連携

☆読書交流会への波及

- ・地域のお年寄りを招いての読書交流会の実施
- ・学区老人クラブ等との連携

☆各学年の学びのフロアに、「ちょっと図書館」の開設

☆さらなる市立図書館との連携

など

(10) 総括～学校づくりの観点から

以上のように、学校図書館の大改造、魅力的な学校図書館づくりが、保護者や地域との密な連携を生み、望ましい学校づくりにつながっていったことが分かると思う。

また、学力向上や読書力向上に寄与したことは言うまでもない。

【3】豊かな自然と共にある笠縫東っ子の育成 ～環境教育の実践～キーワードはSDGs～

I. 研究の概要

本校の環境学習の取り組み全体を「地域の専門家とコラボした学校全体での環境学習「葉山川学習」「学習発表会「葉山川博物館」の取組」「委員会活動による花壇づくりと「FBC コンクール」参加」「笠縫東小ビオトープを活用した学習」の4本の柱で概観したところ、SDGsの8つの目標に照らし合わせて縦軸的（学年、発達）にも横軸的（地域という面としてのとらえ）にも有効な取り組みであることがわかり、課題も明らかにできた。

II. 研究テーマ設定の理由

1. 研究の動機

本校は伝統的に図画工作科の取組とともに環境学習の取り組みが有名である。

環境学習については積み上げがあり、市内外から高い評価を得ている。

では、なぜ、このような取り組みが重要なのか。その意味を改めて問うてみたい。

今の子どもたちは体験の絶対量が限られている。自然と触れ合う機会が減少してきている。この子らに、子ども時代に体験してほしいことという観点で、取り組みを整理してみたい。

2. 研究の目的

小学校時代にしか体得できない、小学校時代にこそ体得させておきたい、豊かな自然に触れる本校の環境教育の取り組みの数々を整理し、次年度以降の学習の進化や定着につなげ、豊かな情操ひいては時代を生き抜く生きる力の育成につなげたい。

3. 研究の仮説

すでに行ってきた取り組みの数々を整理することで、本校の子どもたちの生きる力育成につながるだろう。

III. 研究の方法

本校の取り組みを、研究の実際に挙げる4つの項目で整理し考察する。その際、SDGsをキーワードとして取り入れる。

SDGsとは、世界が2016年から2030年までに達成すべき17の環境や開発に関する国際目標。Sustainable Development Goalsの略称で、日本では「持続可能な開発目標」と訳される。2015年9月の国連持続可能な開発サミットで世界193か国が合意し、2015年に達成期限を迎えたミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）の後継として採択された。地球環境や気候変動に配慮しながら、持続可能な暮らしや社会を営むための、世界各国の政府や自治体、非政府組織、非営利団体だけでなく、民間企業や個人などにも共通した目標である。発効は2016年1月。「だれひとり取り残さない」（No one will be left behind.）をスローガンに、「貧困や飢餓の根絶」「質の高い教育の実現」「女性の社会進出の促進」「再生可能エネルギーの利用」「経済成長と、生産的で働きがいのある雇用の確保」「強靱（きょうじん）なインフラ構築と持続可能な産業化・技術革新の促進」「不平等の是正」「気候変動への対策」「海洋資源の保全」「陸域生態系、森林資源の保全」など17の目標と、各目標を実現するための169のターゲットからなる。MDGsが途上国の貧困・飢餓の撲滅や教育の確保に主眼を置いていたのに対し、SDGsはすべての国・地域を対象とし、MDGsの目標に加えて経済危機、気候変動、伝染病、難民や紛争などへの対処に力点を置いている。目標には法的拘束力はなく、達成状況を測る方法も各国に任されている。

日本は2016年（平成28）5月にSDGs推進本部を設置し、民間企業や各種団体、消費者とも連携した実施方針を打ち

出した。

1. 地域の専門家とコラボした学校全体での環境学習「葉山川学習」
2. 学習発表会「葉山川博物館」の取組
3. 委員会活動による花壇づくりと「FBC コンクール」参加
4. 笠縫東小ビオトープを活用した学習

IV. 研究の実際

1. 地域の専門家とコラボした学校全体での環境学習「葉山川学習」
 - ・事前打合せから活動当日まで、計画立案と実施、成果を振り返る。
 - ・地域の専門家の方々と1年間取り組んでいる。
2. 学習発表会「葉山川博物館」の取組
 - ・企画案検討。実施後、成果を振り返り、次年度に生かす。
 - ・本年度の発表内容は下図。(省略)

4 質の高い教育を
みんなに

17 パートナーシップで
目標を達成しよう



6 安全な水を世界中に

3 すべての人に健康と福祉を



考察

- ・今年の「葉山川博物館」の実際 (省略)
- ・また、下記の地域や保護者の方の意見にあるように、地域全体に受け入れられていることがわかる。
- ・すでに、学校の取り組みというよりは、学区、地域全体の取り組みになっている。
- ・そして、特に水環境に特化した学びの場にもなっていることがわかる。



- ・例年より、時間的にもスペース的にも余裕があり、楽しめました。(40代)
- ・しっかりと組立(計画)ができていて、どこの説明も興味がわき、よかったです。子どもたちは真剣に取り組んでいたと思います。うまく指導されていると思います。(50代)
- ・よく調べていて、とてもよかったです。説明も大きな声でできていて、聞く人のことを考えて、いろいろ工夫できていました。(40代)
- ・5年生のタブレットを使った発表が良かった。3年生の文章を暗記しての発表がすごいと思った。いっぱい練習したんだろうなあと考えた。(30代)

- ・葉山川に対しての自分の意見や思いがしっかり伝わりました。(50代)
- ・グループごとに発表の仕方、プレゼン方法など様々なカラーが出ていて、とても興味深かったです。(40代)
- ・3年生の発表の絵がとても上手でした。草むらや川の中から植物を探すのが楽しかったです。(30代)
- ・図表を使って、大きな声で説明できて、分かりやすかった。子どもの表現力育成、発表力養成にはよい機会だと思った。(70代)
- ・どの学年も、一生懸命発表し、声に出して伝えること、コミュニケーションをとる楽しさが表れた素敵な発表でした。(40代)
- ・みなさんが葉山川を大切にしていることがよくわかりました。(50代)
- ・小学生の調べ学習とは思えないくらいクオリティが高かった。(20代)
- ・実際に自分たちの五感で感じたことを、十分に表現できていたと思います。(50代)
- ・葉山川には多くの自然が残っていて、後世に大切に残していかないといけませんね。これを機会に親子で、環境についてもっと考える時間を持ちたいです。(30代)
- ・学芸員の子どもたちが元気に楽しそうに発表している姿に感動しました。これからも地域の自然に関心を持ち、未来の子どもたちへも、美しい琵琶湖や自然を楽しんでもらえるように努めてください。がんばってください。(70代)
- ・子どもたちの発見とアイデアが詰まっていて、こちらが勉強になりました。(40代)
- ・どの学年も、皆が協力して、知恵と力を出して取り組まれ、工夫が凝らされていました。毎年来ても、毎年違うことが聞けて、楽しいです。(30代)

11 住み続けられる街づくりを

3. 委員会活動による花壇づくりと「FBCコンクール」参加

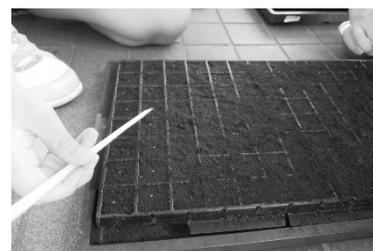
- ・計画的な委員会活動と、その成果としてのFBC参加

「花生き生き委員会」の活動として、花の栽培・花壇の管理に取り組んだ。

5月15～17日委員会活動 種まき



15 陸の豊かさを守ろう



5月22日(火)委員会活動 春花壇(バンジーなど)種取り

花壇のデザイン考案



『種取りをしよう』
「こんなところに種ができるのかあ。」
「あった、あった！」

6月2日(土) PTA 作業 春花壇解体、後始末、除草

職員作業 花壇整地、堆肥熟成・殺虫のためのシート張り(～7月3日)



6月18日(月) 委員会活動 ポット土入れ、苗移植、サブ花壇除草



休み時間返上
『ポットに育苗土を入れよう』
「いったいいくつ作るの?」
「3000 くらい…」 「ええー!？」

苗!
苗!
苗!



セルからポットに苗を移植
『ポット上げ作業』
「小さくてかわいいな。
大きく育ててね。」



6月19～22日 委員会活動 デザイン全校アンケート



給食時間に教室訪問
『デザイン全校アンケート』
「3つ紹介します。」
「①がいいと思う人。」
「はーい！」

7月23日(月) 職員作業 メイン花壇定植

夏休み期間 職員当番 水やり朝夕、除草、追肥週1回 ・花壇生育経過



9月3日(月) 委員会活動 運動会用プランター花つみ 除草

その他：プランター、小花壇、玄関前花壇

花生き生き委員会の一人1プランター栽培、保護者への花苗配布

笠縫東こども園に花苗を配布計約3000本の苗を育てた。

4. 笠縫東小ビオトープを活用した学習

- ・ 常時活動と、各教科学習への発展
- ・ 委員会活動として年間を通じて自然に親しむフィールドとして活用できた

14 海湖池の豊かさを守ろう

13 気候変動に具体的な対策を



V. 研究のまとめ

SDGs とつなげて考察すると、本校の環境学習の取り組みは、地域の専門家とコラボした学校全体での環境学習「葉山川学習」は、

17 しっかりしたパートナーシップを構築して実践できている。

4 そのことにより、非常に質の高い教育を行えている

学習発表会「葉山川博物館」の取組は、

3 地域のあらゆる年齢のすべての人に受け入れられていて、健康的な生活の維持に貢献している。

6 水環境に特化した取り組みができている。

委員会活動による花壇づくりと「FBC コンクール」参加は、

15 陸上の緑化につながる取り組みとなっていて

11 校地内を訪れる地域住民の方と緑豊かで、花いっぱいの素晴らしい景観を共有し、プランター配置苗の配布などで住み続けたい学区全体のまちづくりに寄与している。

笠縫東小ビオトープを活用した学習は、

14 海湖川につながる池を観察したりする活動を通して、その大切さを考える活動になっている。

13 それら全体を通して、地球の温暖化など、気候変動に視野を広げることができている。

総括して、縦軸と横軸に網羅した取り組みになっていると考えてよい。つまり、縦軸には、1年生から6年生に向けて、横軸には、校地内も、全体を面としてとらえられているし、敷地横を流れる葉山川や、その河口から広がる琵琶湖まで含め、学区内全体をフィールドとした学びが展開できている。まさしく、学区・地域全体を巻き込んだ、一体となった学校づくりに昇華した。

今後は、今回整理したことで明らかになった、下記事項に着手していきたい。

- ◆授業数過多のため、全学年のすべての取り組みを精査し、必要なものは残しつつ、一定授業数を削減しなければならない。
- ◆4年生に、滋賀県が展開する「やまのこ学習」を取り入れる必要がある。
- ◆毎年、その学年の子どもたちの追究したいテーマは大事にしながらも、縦のつながりを強化する必要がある。

4. 考察と結論

以上、教員養成や学校づくりについて、歴史的変遷を踏まえ、現場での実践研究を考察する中で、教員は現場でこそ大きく成長するものであることを実証できた。具体的には、教員の指導技術はキャリアの差（在職年数の差など）、個人差が大きいですが、図画工作科の指導技術の向上を現場の教員間で切磋琢磨し、交流して磨き合うことで高まり合い、自信につながっていった。

学校づくりについても、学区・地域とともに歩んでこそ効果をあげることを実証できた。具体的には、学校図書館を中心にした学校づくりでも、学校図書館大改造では県立図書館等の専門家の指導が大きかったが、協力は保護者や学区のボランティアであり、朝の読み聞かせ等の読書ボランティアは保護者等の力が大きかった。

豊かな自然と共にある笠縫東っ子の育成を通してでも、学区や地域をフィールドにした環境学習では保護者や地域の方々の協力により内容の豊富な学びが展開でき、特色ある学校づくりとなった。

[引用・参考文献]

- ・2006 中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」
- ・2012 中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質力量の総合的な向上方策について」
- ・2005 学校教育課程論 原 清治 編 学文社
- ・2015 教職概論 佐藤晴雄 著 学陽書房

松宮孝明 子ども学科准教授